

海外事例 (デンマーク)

欧米諸国では一般に、日本よりも建物をながく使う習慣があり、古い学校を改修しながら使い続けることは珍しくない。デンマークでは現在、児童生徒数の増加と10年前に施行された新カリキュラムに対応するため



に、学校の新築と既存施設の増築、改修が盛んに行われている。新カリキュラムでは教科統合的なプロジェクト学習が大幅に取り入れられたが、それが10年を経て日常の教育実践に定着し、校舎に対する具体的なニーズが顕在化してきた段階にある。日本における「総合的な学

習の時間」のような取り組みを先取りしており、それに対応した機能更新の方法の参考になる例も多い。ここでは既存施設の有効活用事例を2校紹介する。いずれもコペンハーゲン近郊の学校である。

デンマークの学校は伝統的に学級単位を重視し、日本と同様、校舎は普通教室と特別教室に明確に分ける構成が一般的である。既存校舎の改修では、施設に余裕がない状況であるため、複数の教室を結びつけてフレキシビリティを高めると同時に小集団で活動する空間を確保すること等、限られた面積をいかにうまく活用するか、が主眼になっている。

地域住民によるクラブ・サークル活動に学校施設（特に体育施設）を利用する場合は多く、校舎の一角にクラブハウスが組み込まれている例や、校舎の一部を職業訓練校や夜間学校のような生涯学習プログラムが利用する



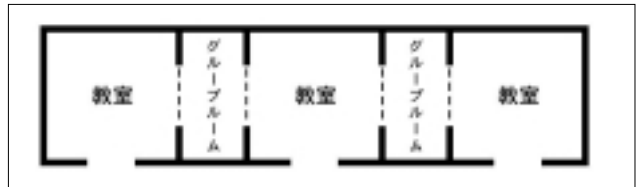
中庭にガラス屋根をかけた多目的ホール

例もある。地域との連携については、保護者と学校（特に担任との間の）連携は密接だが、英米や日本のように、学校活動が地域活動と合同したり、地域ボランティアが教育活動をサポートするような結びつきはあまり

ないようである。共働きが一般的であることと、教育や福祉のようなサービスはボランティアの善意に依存するのでなく、公的に保障されるべきだという意識も背景にはある。

事例 1：チョーネゴール校 (Tjørnegaardsskolen)

もともとあった中庭にガラス屋根をかけて多目的ホールとし、さらに低学年棟を増築するとともに既存部分の教室まわりを大改造した。既存部分、増築部分ともに、3教室がワンセットとなる構成で、教室に挟まれてグルーブルームが設けられている。部屋の間のスライディングドアは開放でき、全体をつなげて使うことができる。複数のクラスを横断する活動や、小集団に分かれて学習をする空間が必要であるが、面積の余裕がないための工夫である。黒板が動いて間仕切り壁になる、机の大きさが大小に変えられる等、家具やしつらえも限られた空間をフレキシブルに使うためにデザインされている。



教室まわりの構成



教室間を開放した状態



間仕切りにもなる黒板

事例 2：『未来の教室』

学級担任と副担任の2人が、新しい教育スタイルのために教室空間を変革した事例。教育省や教育委員会からの助成を得て、2人の建築学生と協同で家具をデザインし、教室のリノベーションを行った。正面の教卓と黒板を廃し、中央に大テーブルを置き、黒板を3カ所に分散して学習時に児童も使えるようにしている。教室は腰高の棚でいくつかのコーナーにゆるやかに分けられ、児童は数人ずつのグループで座る。この構成によって、通常の大きさの教室で、小グループでの活動も、一斉授業も、異なる活動の同時並行もできるようになった。限られた教室空間を「よく」使う好例。



低い棚で区切られた教室



中央のテーブルで個別指導



児童主体の学習のために教室を変えた



複数のグループ学習が同時進行中